

ユングのタイプ論から見た三島由紀夫の 晩年の心理についての一考察

五味淵 高志 鉤 治雄

『教育学論集』第70号

(2018年3月)

ユングのタイプ論から見た三島由紀夫の 晩年の心理についての一考察

五味淵 高志 鉤 治雄

はじめに

ユングの「タイプ論」では意識の基本的な傾向を外向と内向に分ち、意識には感覚、直感、感情、思考の四つの機能があるとしている。四つの機能は、外向感覚、外向直感、外向感情、外向思考、内向感覚、内向直感、内向感情、内向思考として機能しており、さらに、感覚機能が主である場合補助となるのは思考か感情であり、直感が主機能である場合は、補助機能は思考か感情である。感情が主機能である場合は、補助機能は感覚か直感であり、思考が主機能である場合、補助機能は同様に感覚か直感である。つまり、ユングは心理的タイプを十六に一応分類しているわけである^(注1)。これらのタイプが、実際にどのようなものであるかを理解することは容易ではない。

そこで、事例に即して、タイプ論のダイナミズムを分析し考察した。特に、重要な現代文学者の一人であり、近年、再評価の声も高い三島由紀夫についてやや詳しく述べた。三島由紀夫は内向思考型と思われるが、思考機能の一面的発達が生徒人となしたかわり、同時に、中年期に補助機能である感覚機能のやや病的といって良い分化がはじまり、相伴って活性化したほとんど未分化と言って良い感情機能の圧倒的な力が、劇的な行動を引き起こしたと考えることが出来る。

善悪は別として、現在にまで反響するいわゆる三島事件を形成したプロセスを、このように解釈することも出来るのである。これは運命的と言ってよい人格の変化に、タイプ論からのアプローチが、何らかの影響を与え得る可能性を物語るのではないだろうか。

以下、三島由紀夫の中年期の心理をユングのタイプ論から考察した。ユングのタイプ論を概説し精神病理学との関係を論じ、またユングのタイプ論の問題点を指摘した。その上で、事例を通して、ユングのタイプ論が心理現象の理解において鋭利な道具となりうることを示した。あわせて、三島由紀夫の晩年の心理をタイプのダイナミズムの視点から分析し、考察した。

タイプの解説において誤解を生じやすい優越機能、劣等機能という言葉は避け、分化機能、未分化機能とした。文中敬称は略し、年号は必要な場合は、元号と西暦を併

記した。

1. タイプ論とユングの個人史

タイプ論の一般的説明に入る前に、タイプ論とユングの個人史との関係にふれたい。ユングとフロイトの交流は、1906年ユングが公式の場でフロイトの精神分析を擁護したことに始まる。当時、ユングはオイゲン・ブロイラーが中心者であるブルツヘッリ病院の医長であり、チューリッヒ大学医学部私講師であった。ブロイラーは、精神科医としては例外的に精神分析に好意的であり、ユングの発言を容認したと思われるが、精神分析学とアカデミズムとの当時の関係を思えば、勇氣ある発言であったと思われる。ユングとフロイトは、文通等を通し、急速に関係を深め、1907年2月、フロイトの自宅を訪ねた際には、一昼夜熱狂的に語りあったとされる。1909年には、キュスナハトで個人開業し、ユングは精神科医としてアカデミズムと直接的な関係を失う。

事実上の師弟関係となったユングとフロイトは、1909年9月のクラーク大学の客員講義等の共同活動を行い、1910年5月には、ユングは「国際分析協会」の初代会長に就任した。しかし、既に両者の心理学的立場の違いは歴然としており、1912年に発刊されたユングの心理学者としての最初の大著「変容の象徴」では、フロイトと根本的に異なるリピード論を展開しており、事実上の離反宣言と言える内容となっている。1914年7月には、国際分析学会から脱退し、フロイトとフロイトの学派との関係を断っている。

その後、著作を含め心理学者としての目立った外的活動は停止するが、この間の内的体験の凄まじさは、「赤の書」に明瞭である。それは少なくとも精神病症状に類するものであり、あえて言えば、精神病発症の危機がきびすを接していたと言って良い。しかし、同時に、箱庭療法、描画療法、能動的想像法などが自己治癒への試みとして原形をあらわしており、ユング心理学の祖型はこの時期に用意されたと言えるべきである。この8年になんなんとする沈黙の後、1921年に上梓されたのが「タイプ論」なのである。

ユングは、この著作の執筆の動機をフロイトとアドラーの心理学を統合することとしているが、外的要因としては、フロイトとの離別が大きいであろう。しかし、分野を問わず優れた弟子が別派をなすことは珍しいことではなく、前に述べたごとき内的体験の本質的原因とは思われない。様々な外的要因をきっかけとして、ユングの心的領域の本質が顕われたと見るべきであろう。

この一連の体験を、ユングは無意識との対決としているが、内的世界の避け難さと、現実性を思い知ったに違いなく、その観点から、いわゆる外的現実がとらえ直されたのだと思われる。これは内的現実と外的現実に対する一定の客観的視点を提供するものであり、内向と外向を基礎とする類型論につながっていったのだと思われる。

この二つの基本的タイプが、いかに普遍的かの証明は、「タイプ論」の前半を占める拡充法を用いた哲学、文学、神学等への言及で充分であると思われるが、反面、現実には個々の事例のタイプを判断することは、必ずしも容易ではない。実際には長期の観察が必要である事が多い。この分かりにくさはどこから来るのだろうか。

先ずユング自身が述べている通り、典型的な内向型や外向型は、いわば絵に描いた餅であり、現実には存在せず^(注2)、外向と内向は様々な程度に混ざり合っており、しかも絶えず変化していることである。また観察者も同様であるため、タイプの判断には、いわゆるアルキメデスの視点が事実上存在しないという特有の困難さがあると思われる。

また、観察者がどちらかのタイプである場合、反対のタイプは、文字どおり盲点であり、そもそも判断の材料自体がないのである。なれた観察者であれば、判断の材料がないことが判断の根拠になるわけであるが、このような意識的な個人は稀であろう。

それでは、ユングのタイプ論は、極めて分化した個人や同様の集団の現象の理解にしか寄与しないのだろうか。冒頭で述べた四機能を概説しつつ考えてみたい。

前に述べた通り、ユングは1903年から1906年にかけて、オイゲン・ブロイラーのもとで勤務しており、ヤスパースの精神病理学的現象学に基づいた本格的な訓練を受けていたと考えられる。精神現象の観察には必須のことであり、これは今日でも同様である。ヤスパースは、「精神病理学原論」で精神症状を感覚、思考、感情、意欲その他に分類しているが^(注3)、ユングは、感覚、思考、感情に、いかにもユングらしく直感機能をつけ加えたのである。

さらに、感覚と直感、思考と感情は互いに排斥し合うとし、排斥された機能は半ば無意識的になり、意識的な機能との力動を形成するとした。ここに補助機能を加えると、一応、三機能間のダイナミズムが存在することになる。しかし、この関係の中で補助機能の対立機能はどのような位置を占めるのだろうか。主機能と対立機能との関係と相似した関係が、補助機能とその対立機能との間にもあるに違いないが、この四機能のダイナミズムの様相は、ほとんどといって良いほどに語られていないのである。さらに、四機能それぞれの反対タイプ同士の力動を考慮に入れば、さらに、複雑な心理現象が呈示されることになる。次に、事例に即してタイプのダイナミズムについて考えてみたい。

2. タイプのダイナミズム～事例を通して

事例は50代男性。出生、生育に問題はなく、遺伝負因なし。結婚歴はあるが、離婚。自子なし。身体疾患の既往なし。抑うつ状態となったことはあるが、治療は受けていない。職業は会社員で3回の転職歴あり。軽い抑うつを主訴として来院した。薬物療法も分析治療も心理検査も希望しないため、通常の面接を週一度行うこととした。

面接を繰り返すうち、タイプの問題が基底にあることが感じられたため、MBTI 質問紙法を念頭におき、面接を行うこととしたが、心理テストを思わせるような質問は極力避けた。徐々に明らかになったことは、幼年期に内的イメージが活発な時期があったが、最近になってその記憶が鮮明になってきたこと、また、内的イメージはある種の宗教体験を思わせるものがあり、神話や伝説との類比関係が明らかであると思われた。

一例をあげれば、カラスや猫等の身近な動物との内的交流があり、ある種の会話が成立していた時期があり、さらには、人間でもなく動物でもない存在が視覚されることが稀ではなかった。このような体験は、幼児期には決して珍しいものではなく、また多神教的な世界観の基礎をなしている普遍性を持った体験であると考えられる。この体験が内的体験であるか、実在的な体験であるかは、少なくとも精神療法の場面では問題ではない。問題と思われたのは、このような体験の記憶が初老期まで事実上消失しており、記憶の顕在化に相前後して、抑うつ感が出現していることであった。幼児性健忘は良く知られた現象であり、特に幼児期早期の克明な記憶は存在しないのが普通である。

しかし、このようなやや特異と言って良い体験は、なんらかの痕跡を残すものであり、長期間心的生活に影響を及ぼし続けるのがむしろ一般的である。無論、このような体験が、現代の著しく合理主義的な世界観と相容れないのは当然であるが、通常は、必要に応じて幼児期記憶の執拗なよみがえりは、不当に抑圧された主機能の回帰と考えられた。

面接においては、前に述べたような幼児期の体験は決して特異なものではなく、ある種の世界観の基礎をなすものであり、まして病的なものではないこと。合理主義とは思考機能の作り上げた一つの観点であり、相対的なものであることなどを説明した。このような面接を通して、抑うつ感は次第に改善したため、治療を終結した。この間、一年余を要したが、少なくとも幼児期の体験に対する態度は、困惑ではなく、真摯に向き合おうとする態度に変化していった。

この事例の心的ダイナミズムを、タイプ論に基づいて考えてみたい。この男性は、内向直感型と考えられるが、本来、分化するべきであった主機能が、抑圧され外向思考機能が主として使われていた。抑圧された機能は、男性が中年期にいたると自己主張を開始し、男性の大きな悩みの原因となった。

男性の対立機能である外向感覚機能は、ほぼ未分化な状態で無意識な要素と溶け合っているはずであるが、決して静止状態にあるわけではなく、意識に影響を及ぼし続けていると考えられる。男性の幼児期の記憶は、著しく絵画的と言ってよい特徴を備えており、本来、具体性をもつことが、困難な直感内容に形を与えていたと思われる。つまり、前に述べた四つの心的機能は、独立した機能として働く一方で、相互に関係しており、共同して機能しているのである。

3. 内向感情機能について

それでは、外向思考機能の対立機能である内向感情機能は、どのように現れているのだろうか。精神病理学では、感情を感覚感情、生命感情、心情的感情、精神的感情に分類している。それぞれの詳しい説明は割愛するが、抑うつ感³は生命感情と心情的感情の境界に位置すると思われ、男性の抑うつ症状は、感情機能のあらわれと解釈することができる。つまり、目的論的に言えば、心的機能間の不調和を告げ知らせるものとして、感情機能が働いているのである。感情は、男性においては外向感覚機能に次ぐ未分化機能であり、意識の統制が部分的にしか及ばないため、理由のわからない抑うつ感が断続的に続き、来院の直接の契機となったと考えることができる。

男性の心的機能のダイナミズムは、このように一応理解することができるが、例えば、主機能の対立機能である外向感覚機能は未分化機能であるが、内向感覚機能はどうなのであろうか。感覚機能全体が未分化と考えられるが内向感覚機能は、ある程度分化していると考えられる。内向感覚機能と外向感覚機能は、対立しつつも共同して働いていると思われるが、このようなことが四機能すべてに起こっているのだとすれば、四機能の反対タイプと同一タイプ同士は、どのように関係しているのだろうか。また、それぞれの機能の分化の程度は様々な段階があるはずだが、それを考慮に入れるべきなのではないだろうか。後の問題については、「タイプ論」でユング自らが指摘しており、むしろ、タイプの問題を考察し理解する上で、実際的ではないとして退けている^(注4)。

しかし、前に述べた四機能同士のダイナミズムは、無視することが出来ない困難な問題をはらんでいる。繰り返しになるが、例えば、主機能が内向直感の場合、補助機能は一般に外向思考か外向感情とされるが、補助機能が内向であるケースがありうると思われ、実際にもそうである。つまり、タイプ論で示された16の類型は32類型としなければならない、第三の機能も同様であるなら、64類型が数えられることになる。しかし、このような四機能のダイナミズムを分析し記述することは、私の力量では到底、不可能である。この問題は、「考察」で包括的に述べる。

4. 三島由紀夫の晩年の心理とタイプ

次に、三島由紀夫の主として晩年の心理を、タイプの観点から述べてみたい。三島由紀夫は、大正14年(1925年)、東京四谷区に三子中第一子として生まれる。妊娠時、出産、生育に特に異常なし。遺伝負因なし。昭和6年(1931年)、学習院初等科に入学。昭和12年(1937年)、学習院中等科に入学、この間、祖母夏子のもとで生活する。この頃より、短編小説の習作と詩作をはじめ。昭和17年(1942年)、

学習院高等科に入学。昭和19年(1944年)、東京帝国大学法学部法律学科入学。処女短編集「花ざかりの森」を刊行。

昭和22年(1947年)、東大卒業。この間、数々の短編小説を発表する。翌年、大蔵省に入るが、作家として立つことを決意し退職。昭和24年(1949年)、初の書き下ろし長編であり、出世作ともなった「仮面の告白」を刊行。その後、戯曲にも活動範囲を広げる。昭和30年(1955年)より、ボディビル等の肉体の鍛錬をはじめ。翌年に発刊された「金閣寺」は、三島文学を象徴する作品となった。昭和33年(1958年)に結婚。翌年に執筆された「鏡子の部屋」は、失敗作とされるが、この頃より、映画出演、映画制作(憂国)、写真集の発刊など奇異とも見える行動が目立ちはじめ、同時に、政治的思想的な発言も増えていった。

昭和36年(1961年)には、ノーベル文学賞の候補となるが、受賞には至らなかった。昭和40年(1965年)、遺作となる「豊穡の海」全四巻の第一巻となる「春の雪」の連載を開始。同年には、「太陽と鉄」の連載が開始されている。昭和41年(1966年)に「英霊の聲」を発表。戦後民主主義への批判を強めていく。昭和43年(1968年)には「盾の会」の前身である「祖国防衛隊」を結成。同年国際反戦デーの新宿争乱に乗じて、自衛隊国軍化、九条改正を目的とするクーデターを計画するが失敗。いわゆる右翼思想家、行動家としての側面は、誰の目にも明瞭なものとなった。

昭和44年(1969年)、思想行動小説と言うべき「豊穡の海」第二巻「奔馬」を発表。昭和45年(1970年)2月、第三巻「暁の寺」を(言い知れぬ不快)を感じつつ完成した。同年11月、「豊穡の海」最終巻「天人五衰」を完成し、11月25日、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地内東部総監部の総監室を、森田必勝ほか盾の会会員四名と共に占拠し、バルコニーから檄文をまき、演説を行ったのち、総監室で割腹自殺をとげる。45才であった。

三島文学の分析や評論は数多く、また、その劇的な死の解釈もさまざまである。病跡学的には、双極性障害、パーソナリティー障害(自己愛性、境界性、強迫性障害)、マゾヒズム、同性愛等が指摘されている。

本稿では、主として、タイプの発達のダイナミズムの側面から、三島の特に中年期の心理を分析する。原資料は、小島英人によって平成25年に発見されたジョン・バスターを聞き手とする三島由紀夫のインタビュー「告白」と、「太陽と鉄」を中心に、小説、評論等の三島作品を主に用いる。

小島英人は、「告白」のもととなるインタビューの時期を、「暁の寺」完成直後の2月17日から19日としている(注5)。自決のはほぼ9ヶ月前であり、この間に行われたインタビューは、古林尚による「最後の言葉」が存在するが、質、量ともに貧弱なものである。事実上最後のインタビューとなった「告白」は、1時間20分に及び、テーマは文学論、文明論、芸術観、認識論、政治観、将来書かれるべき作品についての発言等、多岐にわたっている。原音は公開されていないが、三島家の遺族、美輪明

宏など音声聞いたものの感想はリラックスしており、素のままに語っているということと一致しているという。“言い知れぬ不快”を感じつつも、長編を脱稿した開放感からか、文面からもウイスキー・ソーダを飲みつつ、自由に語っていることが充分に伝わる。述べられているテーマは、評論、エッセイ等の内容に共通するものが多く、新味があるとは言い難い。

しかし、バスターの問いに答えて、「太陽と鉄」をことさらにあげて、「あそこにみんな書いてあるんです。あれを本当にわかってくれた人は、僕のやることを全部分かってくれると信じています」^(注6)と述べ、同様の趣旨の言葉を繰り返している。バスターが「太陽と鉄」の訳者であることを考慮しても、この発言は重要であると私は考える。自決に至る思想的とも文学的ともとれる一連の行動の謎を解くヒントが、「太陽と鉄」にあると三島自身が明示していると思われるからである。

5. 作品「太陽と鉄」～タイプ論の視点から

「太陽と鉄」は、昭和40年(1965年)6月から、昭和43年(1967年)11月まで、「批評」に連載された評論とも告白ともエッセイとも言える作品である。文学作品としての評価は高いとは言えないが、三島作品の中でその異例な形式と独特な難解さによって、特異な位置を占めている。この連載の期間が、三島にとってどのような時期であったかは前に述べた。作品は単行本で100頁近いが、三島の作品としては構成的とは言えず、章は設けられておらず、内的な回想と、回想についての独特の分析と、文明評論とも政治的独白と思われる内容が交互に現れる。おそらく、小説の執筆と政治的な行動を含めた対外活動の間に、特定の読み手を想定して書かれたものと思われる。

内容を要約すると、なぜ自身が肉体の鍛錬をするに至り、それがどのような内的な意味を持ち、どのような行為につながっていったかが克明に語られている。タイプの視点から重要と思われる部分を引用し、分析を試みたい。

先ず、冒頭で肉体を果樹園にたとえ、ボディビルを含む鍛錬は果樹園を「せっせと耕すこと」であったとし、その結果、「肉体というものが私の思考の大きな部分を占めるにいたった」^(注7)としている。また、「私は他ならぬ太陽と鉄のおかげで、一つの外国語を学ぼうようにして肉体の言葉を学んだ」とし、肉体の言葉を「私の second language」^(注8)であるとしている。これは重要な発言である。三島は良く知られている通り、深い国文学と漢籍の専門的と言って良い素養のもとにその文学を形づくっており、それは、ある種の世界観の形成をともなっていたといって良い。

つまり、三島の半生を支えた価値の体系とは異なる、あるいは相反する価値の体系が予感されているのである。また、「自分の幼時を思いめぐらすと、私にとっては、言葉の記憶は、肉体の記憶よりはるかに遠くまで遡る」^(注9)としているが、言葉が抽

象的思考を担うものであるかぎり、言葉の記憶とは、思考機能あるいはそれに近いものの記憶であり、肉体の記憶とは、深部感覚に近い身体的感覚の記憶であると考えられる。

つまり、三島において先ず分化したのは、思考機能であり知覚機能が未分化であったと考えられ、中年期に未分化であった知覚機能が、ボディビル等の身体運動を通して意識化され、分化しはじめ、思考機能が作り上げた体系とは異なる「教養」^(注10)を形成しはじめたと考えることができる。思考機能が分化した機能であったことは「私にとっては、知性が—中略—ただ武器として生きるための手段としてしか与えられていなかった」^(注11)としていること、「大きなカテドラルみたいな小説」^(注12)を理想としていたこと、遺作「豊穡の海」の副主人公（実質上の主人公）が、法律の世界に身をおく主知主義的な人物として描かれていることから明らかと思われるが、幼時の世界を夜の世界と表現していること、良く知られた生育歴に認められる内面に沈潜する傾向、三島作品の大きな特徴が自他の内面への深い洞察と分析であり、量的にはわずかなのであるが、川端康成論、オスカーワイルド論等の文芸評論が的確で、特にオスカーワイルド論は作者の内面への深い共感を基礎にしており、国際的にも高い評価を受けていることなどから、三島は内向思考タイプと考えられる。

内向思考の反対機能は外向感情であり、補助機能は感覚か直感であるが、筋肉、内臓等に関わる身体感覚は内向感覚に属すると考えられ、「肉体の思考」とはむしろ思考ではなく、内向感覚が分化するにつれて現れてくる知覚の体系であると考えられる。これは言語化することが困難な領域であり、「太陽と鉄」の分かりにくさの原因の一つであると思われる。理論的には、この知覚の体系は、思考の体系と同程度に高度に分化しうるし、実際にもそうである。（このような知覚が言語化されることは極めてまれであろうが、私見によれば、一例を「五輪書」の水の巻に見ることが出来る）。

「太陽と鉄」で感動的に語られるフリーウエイトにおける筋肉の反応や、スポーツによる疲労と、疲労からの速やかな回復や武道体験等は、特別な体験とは言えず、三島の感動はやや異様に感じられる。この感動が、前記したような高度な身体運動がもたらす知覚からくるものでないのは自明である。それでは、この感動はどこから来るのだろうか。一つには、分化しはじめた機能の持つ目新しさであろう。これは、自身の内に未知の領域を思いがけず発見した喜びであり、本質的には無害である。三島において、「感動」が無害なものでなかったのは明らかであり、別の源泉が想定されなければならない。

題号である「太陽と鉄」の太陽は、当初文字通りの太陽であり、鉄はバーベルであるが、後半、太陽は神聖とも言える意味を帯びる。三島は「私はかくして、永いこと私に恵みを授けたあの太陽とはちがったもう一つの太陽、暗い激情に充ちたもう一つの太陽、決して人の肌を焼かぬ代わりに、さらに異様な輝きを持つ、死の太陽を垣間見ることがあった」^(注13)と表現しているが、この太陽が、内的な太陽であるのは明白

であろう。象徴としての太陽は重要であり、多くの文明圏で太古より神の像と深い関係を持っている。ユングは「変容の象徴」で太陽の象徴に詳しくふれており、エジプトの自己神格化を描いたテキスト、ビンゲンのヒルデガルド、神学者シメオンの神秘体験に現れた内的な太陽をあげている^(注14)。

物理学的には、地球上のエネルギーも物質もほぼ太陽エネルギーが起原であり、太陽が万物を生んだという宗教的とも言える見方は、科学的見地からも妥当であるが、内的な太陽も最高度に重要なリビドーの象徴ないし目標なのである。内的な太陽は、現実の太陽がそうであるように、創造と破壊の両義性を持ち、場合によっては神の像と区別がつかない。三島の想念に現れた「もう一つの太陽」は、破壊の面を表とした神の原型と関係があるように思える。

また、三島が肉体性を伴った英雄主義に移行していったのは偶然ではない。内的な太陽は、太陽の英雄と呼ばれる、より根源的な原型像に深化しうるからである。内的な太陽は抽象性を帯びた神像であるが、心理学的には、人格コンプレックスとして現れる英雄像がより重要であり、心的価値が大きい。太陽の英雄の例は無数と言っても良いが、ヘリオス、サムソン、キリスト、釈迦、本邦ではアマテラス、天皇とその系譜をひくもの、例えば、日本武尊などが直ちに思い浮かぶ。作品では、最後の歌舞伎脚本となった源為朝の古事をもとにした「椿説弓張月」があり、三島は源為朝を日本のオデッセイであるとしている。太古性をもつ悲劇性を伴った英雄的な武士のイメージが、繰り返し三島の空想や夢にあらわれていたのではないか。このような原型像が投影され、より現実的な姿をとれば、特攻隊員、2・26の将校などが現れることになる。

このような原型的と言ってもよい英雄像は、著しい感情価値を帯びていること、破壊性を持った（適応的でない）行動の傾向を持っていることから、未分化機能である外向感情機能の現れであると考えることができる。未分化機能は、半ば無意識である故に、自我のコントロール下にないことが大きな特徴であるが、その他、太古的であり、小児的であり、類型的すなわち集合的である等の性質を持つ。「太陽と鉄」の終わり近くで、前記のような肉体の経験をへて「言葉があのように私を押し込めていた個性の閥を踏み越えて集団の意味に目覚めた」^(注15)としており、「集団は、私には何ものかへの橋、そこを渡れば戻る由もない一つの橋と思われた」^(注16)と告白している。

三島文学の際立った個性と、この「集団」の類型性とある種の無意識性は、著しい対照をなしている。「集団」が現実には、何を意味したかはあまりにも明らかであろう。これは現実の軍隊組織、例えば自衛隊が類型的で太古的、中世的で小児的な集団であることを意味しない。しかし、軍事行動は有史以来繰り返された人間の営為であり、軍組織とあわせて、ある種の原型的な性質を持っていると思われ、未分化機能からとらえれば、前に述べたような性質を持つと見えるのである。これがどこまで軍組織と軍事的行動に起因するか、未分化機能の投影であるかは決めることは出来ない。しかし、三島がそのような存在に惹かれ、陶酔的といってよい感動とともに自身の運

命を見ていたことは、「太陽と鉄」をはじめとした著作（例えば「奔馬」等）と、思想家としての行動からも明らかであるように思える。

このような感情のあり方は、言うまでもなく宗教的であり、未分化機能である外向感情機能に現れたものが、問答無用の説得力と神聖さを持っていたことを示している。このようなものを分析心理学では、ヌミノースと名付けた。ユングはヌミノースを「意志という恣意的な働きによって引き起こし得ない力動的な作用もしくは効果である。逆にヌミノースは、人間という主体を捉え、コントロールする。つまり人間が創り出すというよりも、常にその犠牲となっているとも言える。—中略—ヌミノースは、目に見える対象に帰属する性質でもあれば、目に見えない何ものかの現前がもたらす影響でもあり、意識の特異な変容を引き起こす」^(注17) ものであるとしている。このような性質をおびた圧倒的な感情が、三島を捉えていたように思われる。

以上を要約すれば、内向思考機能のやや偏った分化は、三島を文学において傑出した存在としたが、中年期にはじまった内向感覚機能の分化と偏重は、未分化機能である外向感情機能の奔出に路を開き、三島の晩年を支配するに至ったと考えられる。本来、内向思考機能の補助機能は、外向感覚か外向直感機能であることが多いと考えられるが、三島の進路の選択をみる限り、父梓の影響を考慮しても、現実感覚が劣っていたとは思えない。おそらく、補助機能は外向感覚機能であり、内向感覚機能は前に述べた通り、やや未分化な機能であり、内向感覚機能の分化は、さらに未分化である外向感情の機能の意識化を引き起こしたのだと思われる。直感機能については、「花盛りの森」に見られる中世的な半ば夢に似たイメージが、内向直感機能の現れと思われるが、四機能間のダイナミズムをあらましでも述べることは、私の力量を超えていることは前に述べた。

「太陽と鉄」は、F104の搭乗体験が熱狂的に語られた後、ゲーテのファウストやウェルテルの独白を連想させる、イカロスの墜落をテーマとした詩で終わる。イカロスの神話は、無分別に太陽に近づくものの運命の物語である。新約聖書ヘブル人への手紙10章31節に、「生ける神の手に陥るのは恐ろしい」とある。強大な感情価を持った、太陽の英雄の原型にとらわれた近代人のある種の運命を、三島の生涯は明瞭に物語っているように思われる。

考 察

以上、見てきたように、肉体の記憶についての発言は、おそらく思春期のある時期まで、身体感覚への疎隔があったということである。これは、身体感覚の離人として知られている症状であり、統合失調症、うつ病等の内因性精神病、自閉症スペクトラム、不安障害等の経過中に観察することが出来るが、比較的稀である。離人感を主要症状とする神経症は、離人神経症とされるが、神経症の中核症状は不安であり、離人

は付随的な症状と思われる。幼時期に体の実感がないと訴える児童は存在するが、このような児童は稀であると考えられる。ユングは、「子供の夢」で幼児期記憶が鮮明な児童の中に、身体感覚の疎隔を持つものがあると発言している^(注18)。

三島が「仮面の告白」の冒頭で、出生時の鮮明な記憶を語っていることは良く知られている。また、「仮面の告白」では、同性愛とマゾヒズムを中核とする多形倒錯が語られているが、多形倒錯は小児性欲の特徴であり、三島の幼時期記憶のあり方と無関係とはいえない。「仮面の告白」の全体の印象は、むしろある種のみずみずしさであり、三島における幼児性とは、多形倒錯的傾向とあわせてこのようなものであり、創作の源泉であったと思われる。幼児期の記憶の明瞭さが創作の源泉であり、同時に身体感覚の疎隔の原因でもあったとすれば、前に述べたように、三島の生涯を形作ったものは、このような幼時の記憶のあり方であったともいえるのではないか。

四機能間のダイナミズムのもつ本質的な複雑さについて述べれば、四機能を互いに密接に関係する、ある程度独立した機能単位とすれば、ニュートン力学に起原を持つ多体問題と言われる、数学のアポリアに帰着する。多体問題の原形は、いまだ未解決の太陽と地球と月の軌道計算とその予測であり、機能間のダイナミズムが前に述べたようなのだとすると典型的な多体問題であり、横断的な完全な解析も系全体の予測も不可能なのである。

それでは、人はこのような不可知論の深淵になす術も無く立ちつくさねばならないのだろうか。無論そうではなく、近似的にはニュートン力学は有効であり、実用性には大きな問題はないのは周知の事実である。これは原論的な数論の問題が、日常的な数学の利用を妨げないのと同様である。このようなことは、自然科学の解析全般にいえることである。タイプ論がプシュケーの限らない複雑さと深みに浮かぶ小舟であるとしても、小舟には小舟の役割があり、心の分析の鋭利な道具でありうると思われる。

仮に、晩年の三島をクライアントした場合の精神療法を想定すれば、先ず三島のいわば本拠地は思考機能であり、決して放棄してはならず、圧倒的な感情内容に対抗できるまでに、思考機能を分化させることを提案することがあげられる。これは「暁の寺」で唯識論の分析を通して三島自身が試みていることであるが、三島の唯識論の考察は思弁的にすぎ、また「暁の寺」で考察されている唯識論は大乘アビダルマ経を依経とする、無着の論説を起原とする唯心論的な色彩を帯びたものにすぎず、物質的世界、例えば、肉体の世界を十分に包摂するものとはなり得ないのである。

私見では、唯識哲学は天台智顗の出現を待ってはじめて完成し、実用的な体系となるのであり（現在の天台教学が実用的かどうかの議論はここではおく）、三島の思考力をもってすれば、天台教学を理解することは容易であったと思われる。次に、前に述べた感情機能の現れである心的内容の象徴性を、十分に（おそらく拡充法等によって）意識化し、統合することが目標となるが、これはアナリストにとっても困難な課題であると言う外はない。

次に、MBTI 質問紙法の臨床場面での利用について提言をすると、前に述べたような理由から、単回の施行ではタイプの同定には充分とは言えず、期間をおいて複数回行うこと、被験者を良く知る個人による記載が有効と考えられるが、何よりタイプ論を良く知り、MBTI の限界もわきまえたアナリストによる長期の観察が必要と思われる。

最後に、結論や考察で述べた三島の心理の解釈は、あくまでもタイプ論から見た私の管見にすぎず、ましてや三島文学の解釈や評価にほとんど何の関係もないのは当然である。また三島の劇的な自死は、多くの自死と同様に、外因や内因に容易に還元出来るものではないことを付言しておく。

註

- (1) C. G ユング：タイプ論、みすず書房、1990 (354p-440p)
- (2) 前掲書：(437p)
- (3) ヤスパース：精神病理学原論、みすず書房、1991 (43p-120p)
- (4) C. G ユング：タイプ論、みすず書房、1990 (557p)
- (5) 三島由紀夫：告白 三島由紀夫未公開インタビュー、講談社、2017 (183p-184p)
- (6) 前掲書：(33p)
- (7) 三島由紀夫：太陽と鉄、講談社、2017 (78p)
- (8) 前掲書：(83p)
- (9) 前掲書：(78p)
- (10) 前掲書：(83p)
- (11) 前掲書：(99p)
- (12) 三島由紀夫：告白 三島由紀夫未公開インタビュー、講談社、2017 (27p)
- (13) 三島由紀夫：太陽と鉄、講談社、2017 (115p)
- (14) C. G ユング：変容の象徴、筑摩書房、1988 (142p-149p)
- (15) 三島由紀夫：太陽と鉄、講談社、2017 (155p)
- (16) 前掲書：(158p)
- (17) A. サミュエルズ：ユング心理学辞典、創元社、1994 (124p)
- (18) C. G ユング：子供の夢 1、人文書院、1992 (234p)

参考文献

- C.G ユング：タイプ論、みすず書房、1990.
C.G ユング：変容の象徴、筑摩書房、1988.
C.G ユング：子供の夢、人文書院、1992.

- C. G ユング：赤の書、創元社、2010.
ゲルハルト・ペーア：ユング伝、創元社、1994.
A. サミュエルズ：ユング心理学辞典、創元社、1994.
R. R テアマン、S. C アルブリットン：MBTI への招待、金子書房、2002.
三島由紀夫：告白 三島由紀夫未公開インタビュー、講談社、2017.
三島由紀夫：太陽と鉄、講談社、2017.
三島由紀夫：豊穡の海 1 巻－4 巻、新潮文庫、2009.
三島由紀夫：現代日本文学館 42、文芸春秋社、1966.
三島由紀夫：花盛りの森、憂国、自選短編集、新潮社、1968.
三島由紀夫：作家論、中央公論社、1977.
三島由紀夫：小説家の休暇、新潮文庫、1977.
三島由紀夫：アポロの杯、新潮文庫、2000.
徳岡孝夫：五衰の人、文春文庫、1999.
聖書新共同訳旧約聖書続編付：日本聖書協会、1991.
鎌田茂雄：五輪書、講談社学術文庫、1998.

Mentality of Last Years' Yukio Mishima through Perspectives of Jung's Psychological Types - Discussion

Takashi GOMIBUCHI, Haruo MAGARI

"Psychological Types", Carl Jung contends that there are two general attitudes of consciousness; extraverted and introverted. He also describes four functions of consciousness: sensing, intuition, feeling and thinking. Depending on whether the person is extraverted or introverted, these four functions work as extraverted sensing, extraverted intuition, extraverted feeling, extraverted thinking, introverted sensing, introverted intuition, introverted feeling, and introverted thinking.

Jung further asserts that when sensing is the principal function, thinking or feeling becomes the compensatory function. When intuition is the principal function, the compensatory function becomes thinking or feeling. When feeling is the principal function, compensatory function becomes sensing or intuition. When thinking is the principal function, the compensatory function becomes sensing or intuition. Based on the dynamics of this principal and compensatory relationship Jung classifies consciousness into 16 psychological types.

It is not easy to understand how these types work in real life. We analyzed and discussed the dynamism of the theory of psychological types through some real cases. In particular we examined closely the case of Yukio Mishima, one of the most important modern Japanese writers whose works have the subject of much re-evaluation in recent years. Yukio Mishima could be classified as an introverted thinking type, and the unbalanced development of his thinking function made him an extraordinary man. However, in his middle age, his sensing as compensatory function started to develop in a dramatic, almost morbid way. Moreover, his feeling function, which had previously been underdeveloped, became active to the point that its overwhelming power led him to the dramatic action including the attempt of a coup and his ritual suicide, which was called Mishima Incident. Our examination shows a possible interpretation of this still controversial incident.